

《海外展望》

拉致被害者の再調査開始決定！ 最大障壁が取り除かれる見通しの中 日朝間に蠢く水面下の勢力

(2014年6月4日)

5月26日から3日間、スウェーデンのストックホルムで行われていた日朝協議で合意文書が取り交わされた。北朝鮮側は6月中に拉致問題解決のための「特別調査委員会」を立ち上げ、これと同時に日本側は独自に実施してきた制裁を一部解除することになった。今後の成り行きが注目されるが、

ひとまず今回の日朝両国の決定を歓迎したい。だが喜んでばかりはいられない。日朝間には越えなければならない難題が、まだいくつもある。同時に、障壁を作ろうとする動きも存在している。日本国内の小さなつまらない対立も気にかかるが、何より国際間の巨大な圧力を排除する必要がある。

日朝関係回復を求める北朝鮮の熱意

今年（2014年）1月25日にベトナムのハノイで日朝の外務省秘密会合が開かれた。会合は極秘で、日本のマスコミがこれを知ったのは2月末のことだった。

3月3日、中国の瀋陽で日朝赤十字会談が行われた。大戦中や戦後に北朝鮮で亡くなった日本人の遺骨収集や墓参に関する調整会議だったが、この席に外務省課長級が同席し、日朝協議再開に向けての話し合いが行われた模様だ。

その1週間後の3月10日に、横田滋、早紀江夫妻がモンゴルのウランバートルを訪れ、北朝鮮からやってきた横田めぐみさんの娘キム・ウンギョンさんらと会い、数日間生活を共にしている。直後の3月19、20日には再び瀋陽で日朝赤十字会談が行われ、

このときも外務省課長級が同席している。

その10日後となる3月30～31日には、伊原純一アジア大洋州局長が北京で北朝鮮側と話し合っているが、このときも名目上は「日朝赤十字会談に伊原局長が同席した」ということだった。

それからわずか数日後の4月5日、極秘任務を帯びた外務省関係者が香港に入り、北朝鮮側と接触している。このときには一部は上海から香港に向かい、別な外交官はシンガポール経由で香港入りしている。日朝両政府筋の動きを探ろうとしていた米国、韓国の情報員たちの目を必死で躲そうとしたためだが、米韓側は偵察衛星まで駆使して日朝両国の動きを注視していた模様だ。

この流れからもわかる通り、日朝関係は

回復方向に向かって前進を続けてきた。米
国、韓国を初めとする各国は日朝の動きに
厳しい視線を注ぎ、牽制を続けていたが、

拉致問題解決に動いた金敬姫

平成 14 年（2002 年）9 月 17 日に平壤で
行われた小泉純一郎首相と金正日（キムジ
ョンイル）国防委員長との首脳会談から、
日朝間の協議が本格化した。このとき金正
日国防委員長は、拉致を初めて公式に認め、
謝罪している。日本側が求めた拉致被害者
13 人の所在について北朝鮮側は「4 名生
存、8 人死亡、1 名は入国していない」と
回答、その他、日本側が調査対象として
いなかった 1 名（曾我ひとみさん）につい
て拉致と生存を認め、生存していた計 5 名
は、その後、日本に帰国している。

しかし第二回日朝首脳会談（平成 16 年）
や、その直後から数回にわたって行われた
日朝実務者協議を通して、北朝鮮側は「拉
致問題は解決済み」という態度に終始して
いた。金正日総書記がそのように言明して
いたのだ。

北朝鮮の最高実力者、北朝鮮にとっては
神のような存在である金正日総書記が「解
決済み」と言明した以上、これを覆すのは
至難の業である。そうした状況下、平成 23
年（2011 年）12 月に金正日総書記が亡く
なってしまった。「拉致問題は解決済み」と
いう言葉を翻すことは、もはやできなくな
った。

ところがその後、北朝鮮と深いつながり
を持つ朝鮮総聯の重鎮から貴重な情報が得
られた。金正日の妹である金敬姫（キムギ
ョンヒ）が「私が責任をもって拉致問題を

日朝両国の外交担当者たちは、その隙間を
縫って巧みに動いてきたようにも思える。
しかしそこには、さまざまな障壁もあった。

解決しましょう」と語ったというのだ。た
しかに妹の金敬姫であれば、故・金正日総
書記の言葉を変えることができる。金敬姫
が「責任をもって」と語ったという話は、
単なる憶測情報ではなく、信頼できる筋か
らもたらされた非常に信憑性があるものな
のだ。しかし今年 5 月に 68 歳になった金敬
姫は長らく体調を崩していた。

昨年（平成 25 年／2013 年）12 月に北朝
鮮 NO. 2 といわれた張成沢が粛清、処刑さ
れた。

妻である金敬姫はその直後から公の場に
姿を見せていない。

その理由として、夫・張成沢粛清に合わ
せ、妻も謹慎処分となっているとか、処刑
されたのではないのかといった話も出てい
る。北朝鮮の現状は非常に把握しにくい
が、金敬姫が謹慎処分になるとか、ある
いは粛清されるなど、絶対にあり得ない。
北朝鮮という国家は、金日成が建国した
国であり、憲法でも金日成の国家であると
規定している。金日成の娘である金敬
姫が姿を見せないのは、謹慎や粛清な
どではない。体調不良と考えて間違いな
いだろう。

しかも、このところ長らく姿を見せて
いないということは、体調不良がかなり
重篤である可能性が高い。「拉致問題は
解決済み」という言葉は、もう変えられ
ないかもしれない。

そう思われた矢先に、興味深い情報が寄

せられた。金正恩（キムジョンウン）第一書記自らが、拉致問題解決に動いていると

いうのだ。

拉致問題を乗り越えて

2011年（平成23年）12月17日に金正日総書記が死亡した（公表は12月19日）。葬儀は12月28日に行われた。

日本から葬儀に参列したのは朝鮮総連関係者など約50人ほどだった。

このとき、金正日総書記から信頼され可愛がられていた朝鮮総連の許宗萬（ホジョンマン）議長が葬儀に参列するか否かが注目されていた。許宗萬議長が北朝鮮に帰国すれば、制裁措置により二度と日本に戻って来られなくなる。こうした事情のためだろうか、許宗萬議長は葬儀に参列しなかった。ちなみに許宗萬は、たとえ日本に再入

国できなくとも葬儀に参列するという意思を固めていたらしいが、北朝鮮本国から「帰国するな」と厳命されたとの情報もある。

葬儀には朝鮮総連の南昇祐（ナンスンウン）副議長が参列することになった。総連には、金正恩と会ったことがある人間は、このときまでいなかった。南昇祐は初めて金正恩第一書記と会ったのだ。

ここで南昇祐は金正恩第一書記から「日朝関係正常化は最優先課題である」との言葉を得ている。拉致問題を乗り越えて、平壤宣言に向けて始動する必要があると諭されたという。

二代目ミスターXの出現

平成14年の小泉純一郎首相訪朝、金正日が拉致を認めて謝罪、日朝平壤宣言といった一連のストーリーを陰で仕切った人物が知られている。日本側はこの人物のことを「ミスターX」と呼んでいた。ミスターX自身は「金哲（キムチョル）」と名乗っていたが、韓国筋はこの人物を秘密警察である国家安全保衛部の柳京（リュギョン）副部長と見ていた。その後の状況などから、「ミスターX＝柳京」説は、信憑性の高いものと考えていいだろう。

そのミスターXが2010年末から2011年初頭にかけて韓国を極秘訪問し、南北首脳会談などについて「合意に達した」という。ところがミスターXは北朝鮮に帰国直後に

銃殺刑に処せられたとされる（『日本経済新聞』平成24年7月28日）。

2010年11月に延坪島（ヨンピョンド）砲撃事件で南北が緊張し、両国外交関係者が往来をしたが、このときにミスターXに何らかの罪状が被せられ、処刑されたものと推測できる。罪状は国家情報漏洩罪で、柳京の自宅から多額のドル紙幣が発見されたと伝えられる。この裏には、金正日総書記、そして後継者に決まった金正恩大将、NO.2だった張成沢等々の権力闘争や駆け引きが繰り広げられていたのではないだろうか。

ところがこの後、「国家安全保衛部の柳京副部長の後継者」と名乗る人物が、日本の

政府関係者に接触を求めてきたという（『朝日新聞』平成26年5月31日）。

「二代目ミスターX」の出現である。

二代目ミスターXは、初代が小泉＝金正日会談を設定したのと同様に、日本の外務省、政府関係者の重点人物を巧みに選り分け、懐の奥深くに飛び込み、ゼロに近い状態から一步一步地道な行動を続けていった模様だ。二代目ミスターXが政府関係者の間を動き始めたのは平成23年（2011年）だと「朝日新聞」は伝えている。

このことから、二代目ミスターXに日本政府関係者との接触を命令したのが、亡くなる直前の金正日総書記だったことが理解できる。

北朝鮮側の怒り

今年に入って、北朝鮮の朝日国交正常化交渉担当大使である宋日昊（ソンイルホ）が激怒したことが何度かある。日朝両国が国交正常化に向けて邁進している最中に、宋日昊は何を騒いでいるのか。「小異」は無視して日朝国交正常化という「大同」に従うべきではないのかといった批判も聞かれる。だが状況をよく見ると、宋日昊の怒りもある程度は理解できるものだ。

宋日昊が最初に激怒したのは朝鮮総聯本部の土地建物売却問題である。

四国香川のマルナカホールディングスが総聯本部の土地建物を落札し、マルナカが「総聯には貸さない」と明言したところで、総聯関係者を筆頭に北朝鮮側が激怒した。北朝鮮・朝鮮総聯側としては、「総聯本部とは大使館であり、その機能を持つもの」との認識が強く、日本側もそれは重々理解し

拉致問題を解決し、これを乗り越え、日朝国交正常化交渉に向かわせようと、最初に行動を起こしたのは金正日総書記本人だった！

だからこそ、金正日総書記没後に妹の金敬姫が「私が責任をもって拉致問題を解決しましょう」と発言できたのだ。だからこそ金正恩第一書記は「日朝関係正常化は最優先課題である」と言明したのだ。

北朝鮮が日朝国交正常化に向けて、本気であることが理解できる。

だがいっぽう、日本の政府内部は、決して一枚岩ではないようなのだ。

ている。これまで総聯本部購入に対しては、池口恵観・最福寺法主やモンゴルの企業の名が出ていたが、彼らは総聯あるいは北朝鮮と奥底で繋がっているか、あるいは繋がることができそうだった。今回のマルナカは、そういった匂いがしない。

マルナカの背後に巨大な勢力が隠されているのかもしれないが、少なくともまだ表には出ていない。総聯本部問題に関して、日本政府が政治力を発揮すべきだと総聯も北朝鮮側も考えている。まして日朝協議が順調に進もうとしている今こそ、日本政府が何らかのシグナルとして、総聯本部の問題に口を出してくるはずだと考えていた北朝鮮や総聯にとっては、日本政府側があまりに冷徹であることが納得できないようだ。

さらに宋日昊が激怒を表したのは、5月に入って在日の総聯関係者の自宅など6カ

所が家宅捜索を受けたことだ。

この事件はマスコミには流出せず、またネット上でも探せない状態にあるが、総聯関係者が中国との密輸に関係したとする外為法違反容疑で、京都府警が東京都内の総聯関係者宅などを捜索したものだ。5月末のストックホルムでの日朝協議を直前に控

官邸と外務省の「主導権争い」

「横田夫妻のウランバートル行きを、外務省は直前まで知らなかった」という。

「直前」がどれほどのことを言うか難しいが、「横田夫妻のモンゴル訪問、孫娘との面会」というプログラムを作り、実行したのは、首相官邸の『拉致問題対策本部』である。

どうやら北朝鮮問題に関して、外務省と首相官邸とは同じ方向に向かいながら、自分たちが主導権を握ろうと、奇妙なバトルを展開しているようなのだ。

官邸の「拉致問題対策本部」を仕切るのは古屋特命担当大臣と、今年4月に神奈川県警本部長から内閣府にやってきた石川正一郎事務局長。外務省側は岸田文雄大臣、伊原アジア大洋州局長を筆頭に長年、拉致問題、北朝鮮対策を講じてきた外務省の面々である。

現実には、長期間にわたって北朝鮮問題と取り組んできた外務省のほうが、はるかに蓄積データも持っているし、対応にかけても上である。ところが飯島勲参与を招いて平壤を訪問させるなど、官邸側にはそれなりの実力がある。両者が協力すれば問題ないはずなのに、対立はしないまでも、主導権争いをしている始末なのだ。

えた時点での京都府警の動きに対し、「日朝協議に対する妨害活動だ」と総聯側が吠えることも頷ける。

たしかに日本側の対応に、多少のチグハグさを感じる。いったいこれは、どういうことなのだろうか。

今回の協議の場が中国やモンゴルではなく、ストックホルムだという点も、外務省側の配慮だ。ストックホルム開催の理由は、北京や瀋陽だと中国の耳目から逃れられない。盗聴もされている。ウランバートルでも中国や米国の目が光っている。だから東アジアから離れたスウェーデンで、とされている。しかしじっさいのところ、ストックホルムといえば大戦前から全世界のスパイの暗躍場として知られる場所。日本も日露戦争以前から明石元二郎が欧州諜報最前線に位置づけ、以来連綿と諜報活動の拠点としてきた市である。ストックホルムとしたのは、官邸の拉致問題対策本部が手も足も出せない場所という意味である。

これに対して、朝鮮総聯本部問題を短期間にマルナカに売却と決定させ、また意味不明の外為法違反容疑での家宅捜索などを行わせたのは、官邸側が警察検察に圧力をかけて行ったものと推測できる。

こんな主導権争いに血道をあげているようでは、拉致問題の解決はおぼつかない。最終的には両者とも安倍首相の裁断を仰いでいるのだから、首相が本気でコントロールすれば、この対立、主導権争いは氷解させることができるはずだ。本当に怖いのは、

日朝国交回復を阻止しようとする外部の圧

力である。

開城を訪れた韓国の枢機卿

5月21日に神父7人と伴に韓国の枢機卿・廉洙政（ヨムスジョン）が北朝鮮の開城（ケソン）工業団地を訪問した。

開城の歴史について、かんたんに記しておこう。

朝鮮半島中央部、南北境界線に接し、板門店から8キロという至近距離にある開城は、旧くから商業都市として栄え、10世紀以降500年にわたり高麗（王氏高麗）の都だった。14世紀に入り、李氏朝鮮が現在のソウルに都を移した以降も半島最大の商業都市として賑わい、明治43年の日本合邦後は京城都市圏に組み込まれて開発が進み、近代都市に生まれ変わった。

第二次大戦後、38度線より南にあった開城は韓国統治となったが、朝鮮戦争開戦直後に北朝鮮が入り、1953年の休戦協定で北朝鮮領となった。開城住民の多くは朝鮮戦争時に南北に分かれ、離散家族が最多の地域として知られる。開城は1953年当初から北朝鮮の政府直轄地区だったが、太陽政策の象徴として南北首脳会談で工業地区建設計画が合意され、2004年には工場が稼働を開始している。

開城工業地区では5万人の北朝鮮労働者が働いている。この中に、わずかではあるがロザリオ会所属のカトリック教徒がいる。

北朝鮮のカトリック教徒に関する資料は乏しく、実態は不明だが、平壤にはローマカトリックの長忠大聖堂等計4つのキリスト教教会がある。大東亜戦争以前には平壤

は『朝鮮のエルサレム』と呼ばれ、キリスト教徒の多い地域だった。金日成の母である康盤石（カンパンソク）も敬虔なキリスト教徒で、さらには金日成の執務室には7つの燭台が置かれていた事実もある。

日朝協議が進展し、拉致問題再調査、独自制裁一部解除を経て日朝国交正常化交渉が始まろうとしているときに、韓国の枢機卿が開城を訪れた意味は重い。これは朴政権の政治的戦略などという単純なものではない。深奥にバチカンの思惑が感じられる。ローマ法王のフランシスコ教皇が光復節

（8月15日）の時期に訪韓予定だが、廉洙政枢機卿の開城訪問はローマ法王の要請があったと推測するのが妥当なところ。ちなみに北朝鮮問題がどれほど俎上に載るかは不明だが、6月6日に安倍首相もローマ法王と会う予定だ。

経済的にも地政学的にも、日朝の結びつきは底知れぬほど巨大である。しかし民衆のムードは、巨大な日朝合一より南北統一を歓迎する。

半島統一という幻影は日朝国交正常化に水を差す。

日朝国交回復を危険視している勢力は、南北統一というエサを投げかけて、日朝国交回復の邪魔をする可能性もある。そうした勢力とは、米国、韓国、中国だけではない。世界のほとんどが日朝の結びつきの背後に、巨大な日本文化圏を幻視し、その出現を怖れている。

新たな経済制裁で北を締めろ米国

安倍首相が胸を張ってストックホルムでの日朝合意を発表した数時間後に、米国下院の外交委員会が、北朝鮮に対する経済制裁強化の法案を可決した。米国が今回行おうとしている制裁は、北朝鮮のドルによる国際決済を停止させようとするものだ。ドルを使った国際決済は、すべて、ニューヨーク連銀を通過する。ここで北朝鮮のカネの流れをストップすれば、北朝鮮は国際取引ができなくなる。

北朝鮮をめぐる6カ国協議の議長国は中国である。アジアの無法者、駄駄っ子の北朝鮮をコントロールするのは中国の責任だと米国は主張する。米国が北朝鮮を締めれば、北朝鮮はミサイル実験や核実験などを行って暴れ出す。北が暴れば、中国は必死になってこれを抑えようとするし、また北朝鮮の暴発に備えて国境周辺の警戒にカネやヒトを使う必要が出てくる。米国にとって北朝鮮は中国を右往左往させるためのコマでもある。

日朝国交回復が成就すれば、数兆円ともいわれる戦後賠償金が支払われることになるだろう。そのカネが新たな核開発や軍事費に使用されるとというのが、米国が日朝国交回復に待ったをかける表向きの主な理由

拉致問題の解決、日朝国交正常化のために

日本としては何としても日朝国交正常化を実現したい。

そのためには拉致問題の「再調査」だけではなく、これを「解決」させなければならない。解決とは何を意味するか。特定失

である。じっさいには日本が賠償金を支払ったとしても、そのほとんどは北朝鮮国内のインフラ整備に使われるし、その道路や工場、橋梁等々を建設するのは日本のゼネコンなどである。日本のカネで日本企業が潤い、北朝鮮の国内整備が進めば、日朝間はますます強固に結びつく。

1970年くらいまでは、北朝鮮と韓国では圧倒的に北朝鮮の工業力が上位にあったことはよく知られている。

1965年（昭和40年）に日韓基本条約が結ばれ、日本から11億ドル（1ドル=360円）の経済協力金が拠出され、これを基に道路やダム、工場などのインフラ整備が進み、漢江の奇跡と呼ばれる経済発展が成し遂げられた。北朝鮮にこれに匹敵する資金が流れ込めば、どうなるか。

日本型を中心とする日朝経済圏が完成する。

それは韓国にとっても、米国にとっても、中国にとっても、ありがたいものではない。

オーバーに言えばヤルタ・ポツダム体制破壊につながる。世界の戦後枠組みが壊れてしまう。

こうした諸々の要因から、世界は日朝国交正常化を歓迎していない。

踪者すべてが現れることなどない。こんにち多くの日本人にとって拉致問題の解決とは「横田めぐみさん拉致事件の解決」を意味する。北朝鮮政府はめぐみさんは死亡したと主張し、横田滋、早紀江夫妻がそれを

呑み込み納得してもらうことが「拉致問題の解決」だと考えているようだ。

では、横田めぐみさんはほんとうに死亡したのだろうか。

北朝鮮側はめぐみさんは1994年4月に自殺したという。

しかし北朝鮮から帰国した地村富貴恵さんが、その後も生きていたと証言したり、脱北工作員が2001年に平壤市龍城区域の招待所にいたと証言するなど、めぐみさん生存情報は数多い。そして今年3月にウランバートルで孫娘キム・ウンギョンさんと5日間生活を共にして帰国した横田早紀江

さんが、帰国直後に「救う会」の西岡会長などに「めぐみが活着しているとの確信は揺るぎない」と力強く語ったことなどから、めぐみさん生存の可能性はなお高いものと考えられる。

日朝国交回復に向けてさまざまな力学が働き、情報が錯綜することだろう。その混乱を乗り越えて横田めぐみさんが登場すれば、事態は急変することだろう。

日朝間の物事の進展状況は、予想をはるかに越えて速い。急展開が日朝両国の未来にとって望ましい形になるよう祈ってやまない。■